

会 話 5

小林 典子

Conversation 5

KOBAYASHI Noriko

1. クラスの実施形態

| | |
|----------------|---------------------------------|
| 時間数 | 1コマ/週 × 10週 |
| 登録者数 | 15人前後 (学期によって異なる) |
| レベル5 | 500時間以上学習した中上級レベル |
| ボランティア (日本人) 数 | 5人前後 |
| 内容 | 日常会話、自由会話、発表 プリントとテープによる教材使用 |

会話5のクラスの、学生たちの特長として、次のようなことが言える。中国の学生は漢字語彙は豊かであるが、話したり、聞いたりすることが苦手で、文法が不正確な場合が多い。韓国の学生は日常会話のほうが、フォーマルなスタイルの話し方より得意で、漢字語彙が豊富とは言えないようである。ヨーロッパなど非漢字圏の日本学専攻の学生の場合も、漢字語彙は苦手だが、文法は正確に使える人が多く、また日常会話でも書き言葉のような話し方をしてしまう場合がある。このように、一つのクラスの中に、異なる弱点を持っている人々が混在しているクラスだと言える。

2. 会話5の受講生が授業に期待していること

このクラスは、このレベルにプレースされた学生による全く自由な選択科目である。レベル4までは、例えば文型文法が必須要件であるが、レベル5についてはそのようなことがない。そこで、授業出席者にこのクラスを取る理由を自由記述させたところ、以下のとおりであった。

会話5を受講する理由

回答者 (全部で12人、2つ書いている人を含む)

| | | |
|---|----------------------------------|----|
| 1 | 会話 (日常会話、自然な日本語、普通の会話) | 7人 |
| 2 | 文化、習慣を知るため | 2人 |
| 3 | ゼミでの発表 | 2人 |
| 4 | 入試面接のため | 1人 |
| 5 | 日本人との交流 | 1人 |
| 6 | 友達作り | 1人 |

クラスの大部分が、日常的な会話に自信が持てないために、これを学びたい、と考えていることがわかった。会話5のレベルは一般的な言い方をすれば、中上級レベルであり、日常会話には、あまり不自由しないレベルと考えられるのであるが、自然な会話を学びたい要求があることが分かった。そこで、授業は、このような要求に応える内容とすることにした。

3. 日本語ボランティアの参加者

現在、日本人学生による日本語ボランティアはセンターの日本語教育を支援するシステムとして根付き、留学生たちの発話練習の相手として欠かせない存在になっている。このボランティア募集のきっかけは、センターに始めて「会話」という技能クラスが設けられたときに、留学生から日本人学生と話したいという希望があったことによる。その後、恒常的にボランティアの登録が続き、クラスを受講生たちと日本人学生双方が刺激しあい学びあっている。今学期の「会話5」の場合、受講者数とボランティア数の割合は、平均して2(受講者)：1(ボランティア)から3：1程度の割合である。

ボランティアには、対話のモデルを読み上げてもらったり、グループのディスカッションに参加し、普通に、自由に話してもらっている。また、教師が導入する日本語の表現についての感覚「快・不快」など、若い世代でも同じような感覚か確認のため、発言してもらったり、若者の終助詞の使い方などについても、確認をとっている。留学生にとって、教師の発言以上に、同世代の日本人学生の意見は、説得力を持つものようである。また、日本人学生は、普段使っている日本語を振り返る機会となっており、教師(筆者)の説明をノートを取りながら聞いている人もいる。

ボランティア参加者には日本語教育専攻の大学院生もいるが、様々な専攻の学類生(学部生)、院生がいる。日本語教育専攻の学生の場合は、留学生との会話において話し方に調整が入るようだが、そうではない学生の場合は、それがないという差異も見られる。

ボランティアの参加の理由としては、以下のようなものがあげられている。

学生ボランティアの参加理由

- 1 日本語教授法を学ぶ（日本語教育専攻の学生、その他）
- 2 自分が外国に留学したとき世話になったので、今度は自分も日本で世話がしたい。
- 3 海外に滞在して外国への興味が深くなったので、外国の人と話したい。

4. 授業内容と進め方

以上に述べてきたような条件から、授業は以下の3タイプを実施している。

<タイプA> 「いい人間関係」を作る日常会話

これは、レベル2, 3, 4といったより低いレベルのクラスで利用している会話教材から、モデル会話を選び出し利用している。自然な日常会話のやりとりは来日直後の学生にはレベルの上位にプレースされた人も必要としていることが判明したからである。ただし、レベル5の学生は、モデル会話の音声テープとその文字スクリプトを渡しておけば自習できるので、導入をクラスですることではない。

教材：「これだけは覚えよう」（『Situational Functional Japanese』（以下「SFJ」）（筑波ランゲージグループ）、及び、『日本語中級文型表現』（以下「中文型」）（衣川他）から、筆者が選択し編集したものを「これだけは覚えよう」と命名したテープと文字スクリプト）である。選択した内容は以下のとおりである。

- 1 依頼・許可求めと断り（中文型より）
- 2 誘い・申し出と断り（SFJより）
- 3 電話の会話と伝言（SFJより）
- 4 苦情と詫言（SFJより）
- 5 相談と助言（中文型）
- 6 好意を受ける（SFJより）

授業の手順

（宿題）テープとスクリプトで自習し、モデルを覚える。そのモデルを参考にして自分たちのオリジナル会話を必要に応じて、2人または3人で作成しその録音テープを授業の2日前までに提出する。クラスの友人と会話を作る学生、日本人の友人を巻き込んで会話を録音する学生、一人で声音を変え二役を演じる学生などがある。

（授業）提出された学生のテープを文字化したものに手書きで訂正を入れたプリント（個人名は消してある）を全員に配る。この際、大切なポイントについて、重点的にフィードバックする。場合によっては、プリントではなく、テープを聴きながら行うこともある。

<タイプB> 発表のための表現

これは、学生からの要望はあまり強くなかったが、大勢の前でスピーチをするのに役立つ表現を学ばせることを目的とし、コースの最後にこれらの表現を使うという条件を課してスピーチをさせている。

教材：プリント（自作）

- | |
|-------------------------------------------------------------------------------------------------|
| (1) 導入部分 例「今から～についてお話したいと思います。」等 テーマの絞込み 例「特に、～に焦点をしばってお話しようと思います」等 |
| (2) トピックの展開 例「どうして、～かという、…….からです。」 疑問反論の語りかけ 例「はたして～でしょうか。」等 トピックを分かりやすくする 例「～と言いますと…….」等 |
| (3) 説明を分かりやすくするためのことばの言い換え 例「～というのは、……のことですが、」等 |
| (4) 引用・伝聞 例「～によると……ということです。」 |
| (5) 自分の考えを述べる 非常に断定的に言う、かなり断定的に言う、遠慮した言い方で言う 等 |
| (6) 分かったことを言う 例「～の結果…….ということがわかりました。」 |
| (7) スピーチを終わる 話をまとめる 例「最後に…….」 終わりの表現 例「では、これで、～終わらせていただきます。」等 |

授業の手順

(授業で) プリント(1)～(7)に沿って説明。

(宿題) 最終スピーチに向けて1コマごとに少しずつ導入された表現を利用しながら、スピーチ原稿を準備し、できたところまでの日本語をチェックする。コースの終わりのスピーチ発表で発表し、教師、ボランティア、学生の全員で、評価項目に沿って、評価する。

<タイプC>日本人ボランティアとの話し合い

「日本人と話したい」という要望に対して、できるだけ、この時間20分を取るようになっている。15分を自由に話し合い、最後の5分は各グループからの話し合いの報告を交代で1名がしている。

話し合いの内容

「自己紹介」「日本に来て驚いたこと」「各国の食事のマナーについて」「理想の夫婦像」、「SARS 汚染地域から帰国した留学生を授業に出席させないことの是非」「昔の子供と比べて

今の子供の学力は落ちているか」などを行った。

授業の手順

(1回目の授業で)教師の側で、2,3トピック用意し、その中からその日のトピックを選ばせる。学生たちは、情報交換、説明、意見述べなど、自由に話し、これは録音テープに収録している。

(2回目の授業で)会話の録音テープの中から、日本語の表現の上で、また会話の内容の点で、重要だと判断した箇所について、各グループから取り出し、全員にフィードバックしている。日本人学生の話し方がいいモデルになったり、若い人の話し方を紹介することになったりしている。

以上、<タイプA>~<タイプC>について紹介したが、1コマの授業で、A,B,Cを全部行うことは、慌ただしすぎて、どれも消化不良となってしまう場合もあるので、その場合は、この3つのうちの2つを組み合わせるようになっている。10週に対して、Aが6つ、Bが7つとなっているのは、そういう調整を可能にするためである。かなり、自習(宿題)を要求しなければ、このクラスの目標は達成されないと考えられる。

5. 評 価

評価の基準は以下のようにしている。会話のクラスということを鑑み、出席率も含めている。

| | | | |
|--------|-----|-------|-----|
| 最終発表 | 40% | 宿題テープ | 20% |
| 授業での評価 | 20% | 出席率 | 20% |